

## 夜に花びら

張 潜弋

教育学部 交換留学生 中国

初めて和歌山に来たのは、飛行機と乗り換え合わせて十時間ぐらいの寝ずの旅の後であった。睡眠不足で眩暈がしたせいなのか、真昼なのに脳は夜に彷徨っていたようだ。然し何ヵ月も経ってから、和歌山に対する印象を訊かれるなら、迷わずに「夜のように感じた」と返事するはずだ。



私は夜が好きな人だ。和歌山、少なくとも私の住んでいる辺りの夜は美しい。夜になると、空に

銀色の蜘蛛の巣が広がってゆく。街灯が暗く、さらさらと流れる川の底から幽かに星は瞬き、私はいつも川沿いを散歩している。或いは窓に向かって、音楽を聴きながら、酒を飲んだり、本を読んだりしている。涼しい月光を浴びていると、耳に入るのは人の騒ぎではなく、ただ車の走りや風の悲鳴である。私には、それだけでがちょうどよい閑かさだ。

和歌山に近いので、大阪には何回も行ったことがあるが、すし詰めめの街が重苦しい気分をはらんでいる。和歌山は、街路にあまり人がなくて歩き心地が良い。私の日常生活は、最低限の繋がりを維持しながら、唯自分の世界にのめり込んでいて、孤独と月光を混ぜて一気に飲んだりすることだ。月明かりの淡さと夜空の広さが混じり合うと、孤独感が出て、そのレシピは正に夜そのものである。その感じ、和歌山も同じではあるまいか。渺々たる街並みと清冽な海風、と生み出した孤独感は、和歌山に夜のベールを付けた。

勿論経済や政治から見れば、その点良い点と見なされ難いかもしれぬ。自分の我儘でもあるか、特にその寂しさや涼しさを気に入っている。生きるのも同様なことであろう。「友だちを作った方がいいよ」のような言葉を常に言われていて、よく考えれば、確かに無理からぬ言葉である。寂しさは、和歌山という地域にも、私という人にも存在している欠点である。世の中には寂しいより賑やかな方が、暗いより明るい方が良いという「常識」があるらしい。若し私が月に吠える犬であれば、相手は合唱している黄色い娘とも言えるかもしれない。そう考えると、私たちは同病相憐れむかもしれぬ。然し、そもそも都市を人格化することは無意味で、根本から無理矢理自分を説得する理由に過ぎない。若しくは自分を安心させる言い訳でもあろう。



そう考えた後、一か月ほど前に、一人で和歌山城へ行った。夜ではなく、来る時と同様な真昼であった。桜の季節なので、人が普段より多かったが、桜の木の下に座ることが出来た。私はそこに微睡んでいるかのように、目を細めて桜の隙間から空を見上げていた。宝石の如く、青空は桜の波で輝いていた。時には風がこっそりときて、枝の上に揺れている春を丸ごと盗んでしまい、ただ舞い散る涙

が残っていた。嗚呼、桜咲き、桜吹雪とは実に美しい光景だったのに、何だか心の底から哀れが浮かんできた。

人と人との出会いや繋がりも、さながら桜の花のように、美しく、儂いものである。人類の寿命に対して花時は一瞬のみである。然れども、人は特にこの一瞬の幻に浸っていることを好むらしい。そして、いつもその幻が破滅する瞬間を謳歌している。なんと浅ましい生き物であろう。毎年必ず同じく桜が咲いているが、毎年見に来る人は必ずしも同じではない。和歌山の歴史に対して人の寿命は一瞬のみであって、時間の川に対して、和歌山、延いては日本の歴史も一瞬のみであろう。「朝菌は晦朔を知らず、蟪蛄は春秋を知らず。」と荘子はそう書いた。我々も所謂「小年」であり、未来について何にも知らぬままに生きてゆく。とすれば、一瞬の幻に拘る必要はあるまい。

然しこの瞬間、多数の風景が重なってきた。繁栄していた紀州であれ、バブル崩壊の後の商店街であれ、全部蜃気楼のように遠ざかってしまった。実は、この蜘蛛の糸は何時か切れてしまうのだろうか、我々は何時か地獄へ逆落としに落ちてしまうのだろうか、誰にも分かるはずがない。唯何にも気づかぬふりをしてせつせと登っている。従わないと、すぐ社会という海に沈んでしまうことが良く分かっている。それこそが、我々が人間として生まれて来ると共に生じる呪いであろう。都市も同じく、苦心して人を増やさなければ、自分の印象を最大限に宣伝しなければ、歴史という川に沈んでしまうのであろう。余程理不尽なルールではあるまいか。結局、誰でもふさわしくない仮面をかぶらざるを得ない。我々はこうして生き抜くしかない。

急に私は目を見開いた。日が当たる場所、花びらはもう数えられるだけであった。

## 夜与散花

张潜弋

教育学 交换留学生 中国

最初来和歌山的时候，我不眠不休地做了十几个小时的飞机。也许是因为睡眠不足，到的时候明明是正午，我的大脑却仍徘徊在深夜中。不过纵然已经过去了好几个月，每当我被问道对和歌山的印象时，我仍会不假思索地回答“像夜晚一样”吧。

我一直是一个喜欢夜晚的人。和歌山，至少是我住的地方，这边的夜晚很美。每当夜色降临，银色的蛛网便会在空中展开。昏暗的街灯下，潺潺的溪流，水底幽暗的星光在闪烁着，我习惯沿着河边慢慢地散步。或者面着窗户，放着音乐，或读书，或浅酌。沐浴着清凉的月光，传入耳中的不是喧嚣，而只有驰过的车辆与风的悲鸣，对我而言是恰如其分的娴静。

和歌山离大阪很近，所以我也去过好多次，但拥挤的街头总是孕育着一股压抑感。而和歌山的街头没什么人，散步的感觉也很好。我本来就是讨厌喧闹的人，在国内也是这样，维持着最低限度的联系，只是沉湎于自己的世界里，将孤独混着月光一饮而尽。将淡淡的月光和广袤的夜空调和，就会酝酿出孤独感，而这个配方也正是夜晚自身。这样的感觉，与和歌山不是一样的吗？渺茫的街道和清冽的海风，与产生的孤独感，为和歌山戴上了夜晚的面纱。

当然从政治和经济的角度看，很难看作是一个优点。或许是我的任性吧，我尤其中意这种寂寥和清冷。生命不也是同样的吗？“多交点朋友才好。”我也常常收到这类的建议，仔细考虑也并无道理。这对我也好，对和歌山自身也好，都算是一种缺点。这个世间，有着热闹优于寂寥，开朗优于阴暗这样的常识。如果说我是望月而吠的狗，那对方就是合唱的白衣少

女吧。这样想的话，我们也何尝不是同病相怜。但本来将城市人格化本来就没什么意义，追根到底不过是勉强说服自己的理由罢了，又或者是某种让自己安心的借口吧。

之后，就在一个多月前，我自己去了一趟和歌山城。并不是在夜里，同样是在正午。因为正是赏樱的季节，人要比平时多一些，但我仍然能坐在樱花树下。微寐似的，我半闭着眼，透过樱花的缝隙望着后面的天空。蓝天就像宝石一般，在樱色的波浪中闪耀着。有时风也悄悄地，将枝头上摇曳的春天整个盗走，只留下飘散的泪滴。樱花开，落花雨，明明是如此美妙的光景，不知为何心中却浮起一丝愁怨。

人和人的相遇与连结，正如这满开樱花一样，美丽却脆弱。对人的寿命来说，樱花的花期只有短短的一瞬。然而人们又尤其沉醉于这一瞬的幻景，并总是讴歌着幻景破灭的瞬间。多么浅薄的生物啊。每年樱花都会开放，但每年来赏花的人却不一定是同一批人。对和歌山的历史来说，人的寿命不过短短一瞬，而对时间长河来说，和歌山，以至于日本的历史也不过是短短的一瞬罢了。庄子曾写过“朝菌不知晦朔，蟪蛄不知春秋”，我们也不过是所谓的“小年”，对未来发生的一切不加了解地生活着。这样的话，也就没必要拘泥于一瞬的幻景了吧。

但这个瞬间，无数的景象重叠在我的眼前。繁荣的纪州也好，泡沫崩坏后的商店街也罢，全都如海市蜃楼一般渐渐淡去了。其实，悬着的蛛丝什么时候会断掉，我们何时会坠会地狱，谁也不会知道。只有装作什么都不知道，一个劲地往上爬着。我们明白，不这样做的话，就会立刻沉入名为社会的海底。这是我们人类与生俱来的诅咒。但城市不也一样吗，不绞尽脑汁增加人口，尽力宣传自己的印象，就会沉入名为历史的河底。实在是不讲理的规则不是么？最终，谁都不得不带上不合适的面具。

突然，我睁开了眼。阳光照着的地方，花瓣已经所剩无几了。